

聖三角地帯

吸血鬼

まえたりよう

アメリ

魔女？

青山ライフ出版

聖三角地帯 ◆ 目次

| | | |
|------------|-------|-----|
| 白い血の契約 | | 5 |
| 魔女のお茶会 | I | 24 |
| 吸血鬼のお茶会 | I | 34 |
| 魔女のお茶会 | II | 49 |
| 吸血鬼のお茶会 | II | 54 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | I | 64 |
| 魔女のお茶会 | II | 78 |
| 吸血鬼のお茶会 | II | 83 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | II | 93 |
| 山菜牛乳店の娘 | I | 100 |
| 魔女のお茶会 | IV | 106 |
| 吸血鬼のお茶会 | IV | 115 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | II | 123 |

| | | | |
|------------|-----|-------|-----|
| 山葉牛乳店の娘 | II | | 131 |
| 魔女のお茶会 | V | | 142 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | IV | | 152 |
| 吸血鬼のお茶会 | V | | 166 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | V | | 182 |
| 山葉牛乳店の娘 | II | | 191 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | VI | | 200 |
| 魔女のお茶会 | VI | | 211 |
| 吸血鬼と魔女のお茶会 | VII | | 225 |
| 吸血鬼のお茶会 | VI | | 234 |
| 山葉牛乳店の娘 | IV | | 261 |

白い血の契約

マミコの家から駅まで歩いて十五分、中学校まで二十分、吸血鬼まで三十分。

こんなことになったのはマミコが山葉牛乳店やまはのかんばん娘で、そこにだれかがいるかぎり、相手は幽霊だろうとゾンビだろうと牛乳を売りつける方針を固めていたからだ。

それにしても、ほんとうにそういう部類が町内に住んでいるとは……

五月の初め、夕暮れどき。

配達を終えて帰るところだったマミコは、空き家だと思っていた屋敷の前で急に自転車を停める。

だれかが屋根の上を歩いていた。

ように見えた。

マミコはよその家の前を通ると、つい山葉牛乳店の牛乳箱が置いてあるかどうかチェックしてしまうのだが、この屋敷の場合、見るまでもないと思っていた。

さびついで、くもの巣だらけの門。

とどこどころひびの入った古めかしいれんが塀。

れんが塀にめりこんだ郵便受けの横に、表札をはぎ取られたような跡がのこっている。

門灯のガラスは割れているし、ほこりまみれだ。

どこからどう見ても空き家。

ところが、さつき見た屋根の上の人影はなんだろう。

猫と見まちがえたのだろうか。

二足歩行の猫がいればの話。

そんな猫はいないとすると、泥棒？

それも空き家に入る泥棒がいればの話だ。

空き巣に入れば宝石が隠してあるかもしれないが、空き家にはたぶんないだろう。

とすると、ここは泥棒の家なのかもしれない。

そういう目で見ると、どことなく怪盗が住んでいそうな屋敷ではある。

مامミコは自転車からおりて、スタンドをかける。

泥棒でも半魚人でもいい。

そこにだれかが住んでいる可能性があるかぎり、مامミコは勧誘をこころみる。

それが配達の契約件数によっておこづかいが増減するمامミコの基本姿勢なのだ。

مامミコは荷台の配達ボックスからとりだした小冊子を服の下からおなかにぴったりくつつくように隠して、そろそろと門に近づく。

格子状の門なので、のぞくのはかんたんだ。

月明かりに草木が生い茂る乱雑な庭が照らされている。

手入れをされていなくても、自分の家の庭とはくらべものにならない広さだということはよくわかる。

なかでも屋根裏部屋らしき出窓が突き出した屋根にかぶさるほど大きなケヤキの木は目についた。門から十歩くらいのところは玄関が見える。

街灯の光もそこまでは届かず、はつきりとは見えないが、やっぱり牛乳箱はないようだ。

マミコは山葉牛乳店の牛乳箱が置いてない玄関の存在をゆるさない。

門のまわりにはインターホンらしきものもない。

ごめんください。

マミコは心のなかでそう言いながら、そつと門を押してみる。

門は手ごたえもなく動いた。

不用心な。

マミコは思う。

ほんとに空き家なのかもしれない。

じゃあ、とりあえず怒られないよね。

マミコはさつきより大胆になって、暗い庭に足をふみいれる。

土と同化しかけた石畳が玄関までつづいている。

インターホンがないなら、ノックするしかない。

歩きだそうとして、ふと屋根を見上げたマミコは思わず足をとめる。

あの屋根裏部屋らしき出窓から、明かりがもれている。

さっきまでついでいなかった。

まちがいでなく、だれかいるのだ。

新規契約のチャンス。

いざ、とばかりに玄関に向かおうとしたマミコは、またしても足をとめる。

息も止まりかけた。

玄関が、開け放たれている。

マミコはドアが開く音にも、その気配にも気づかなかった。

ドアの外は暗く、中はずっと暗い。

どう目をこらしても、ドアを開けたはずの人がいない。

幽霊？

もしそうなら、いま目の前にいるのだろうか。

しかし、マミコの基本姿勢はゆるがない。

マミコは玄関の奥の暗闇に呼びかける。

「ごめんくださあい。山葉牛乳店の山葉マミコですけど、ポストにカタログ入れさせてもらっても

いいですかあ？」

返事は、ない。

そのかわり、間に合ってます、と言わんばかりにドアがひとりでに閉まった。

ママコがこの世でいちばん嫌いなことは、なにも言わずにドアを閉められることだ。

あたしの基本姿勢をなめないでよね。

山葉牛乳店の牛乳を取ってくれる幽霊は、いい幽霊。

取ってくれない幽霊は、わるい幽霊。

この家の幽霊はどっちのタイプか、たしかめてやる。

ママコはドアの正面に立って、でかい声を出す。

「もしもおし！ カタログいららないならいらなくて言えばいいでしょ！ せっかく押し売りなんてしたくないって思ってたのに押し売りになっちゃうでしょ！ だいたい顔も出さないなんて失

……」

「う、うるさいぞ」

声だ。人だ。男だ。

いや、人ときまつたわけではない。

低く押し殺した、人間離れた声。

姿は見えないけど、口だけける幽霊なのかもしれない。

とにかく、ドアのむこうに話ができる何者かがいる。

マミコの営業魂に火をつけるには、それだけでじゅうぶんだ。

「もしもし？ ごめんなさい。からかわれてるのかと思っちゃって。どうか山葉牛乳店のカタログもらっていただけますように」

「ヤマハ？ 楽器屋さんかね？」

「牛乳店って言うてるでしょ！」

沈黙。

「もしもし？ たびたびすみません。でも、どうしてみんなそう言うんでしょうね。それじゃあ、今日のところはポストに入れておきますね。今後とも、ごひいきにー」

マミコが帰ろうとすると、背後からまた声が。

「ぎゅ、牛乳なんていらんないよ
なんて。」

マミコの営業魂には何度でも火がつく。

終わりにきノックをくり出そうといきおいよく振りむいたマミコはつぎの瞬間、ぎくりと固まる。ドアが開け放たれている。

またしてもドアを開けた張本人は見えない。

本物なの……？

さすがに気味悪くなる。

「おどろかせてすまない。こゝここまで来れるかな？」

少しふるえていて、少ししか抑揚のない声。

その声は屋根のほうから聞こえる。

マミコは屋根裏部屋らしき出窓からもれていた明かりを思い出して、すぐ屋根が見えるところまでもどる。

人だ。男だ。

あの出窓から顔を出している。

ただ、人とは思えないほど青白い顔で、声からすると男にちがいないはずなのに髪が長すぎる。

マミコは出窓にむかって、ひかえ目な声で言う。

「いま行きますから」

チャンスだ。

あそこにてくれれば、かんとんには逃げられない。

しかも玄関はこれ以上ないくらい開いている。

目が慣れてきて、玄関を上がったさきに階段が見える。

スリッパはあるのかないのかわからないので、靴をぬいでそのまま上がりこむ。

おじゃまします、と言ったときマミコはもう階段をのぼりはじめている。

一直線の階段だ。

幅もマミコの家の階段の倍はある。

家のまんなかに一直線の階段があるなんて、お屋敷の証拠だ。

屋根裏部屋の入り口は、すぐに発見。

廊下のすみに、マミコの家とおなじくらいの階段があつて、その上から明かりがもれている。

「もしもし」

そう言いながら、マミコは階段を上がつて屋根裏部屋に顔をつつこむ。

「あの玄関の自動ドアは、あなたの発明ですか？」

こんな不気味な屋敷にマミコがためらわずに入つてこれたのは、男が幽霊ではなく、発明家にちがいないと思つたからでもある。

髪が長い、顔が青白い、見るからに変人、玄関が勝手に開いたり閉まつたりする。

疑いようがない。

が、その発明家がない。

屋根裏部屋はランプの明かりだけでほの暗く、引越してきたばかりの家みたいに雑然としている。

古本屋かと思うほどそこらじゅうに本が積みあげられ、リサイクル業者かと思うほど古めかしい箱やケースで床から壁まで埋まっている。

そのなかでいちばん場所をとつていて、いちばん意味がわからないのが、部屋のすみに置いてある洋風の棺おけだ。

それに、このにおい。

なぜか落ち着く。

ほこりっぽい空気にまぎれているのは、紅茶の香りだ。

「やあ、よ、よく来たね」

男は、ひらいた出窓のそこから顔をのぞかせて言う。

絶好の商談場所に追いつめたと思ったのに。

マミコは不満げな声を出す。

「もしもおし、どうしてそんなどこにいるの？」

マミコは、はじめに見た屋根の上の人影を思い出す。

どうやら、ほんとに歩いていたらしい。

男は出窓のそこから、ぎこちない笑顔をマミコにむける。

それは何十年ぶりに笑ったみたいなきらいな笑いかたで、男はそんな自分によるこびを感じているようにも見える。

「すまない、じ、じつは今いそがしくてね。ここから話をさせてもらいたい」

「そのすでに脱出したスタイルで？」

「庭のケヤキの手入れをしていたのだ」

「こんな時間に？」

「まだ屋根のそうじもある」

「こんな時間に？」

「夜型の生活でね」

「不健康。そんなあなたのために」

「マミコは本とがらくたのすきまをすり抜け、出窓の前にたどりつく。

「山葉牛乳店は、あるのです」

「ああ、そういえば、楽器屋さんがなんの用かね？」

「だから牛乳だってば！」

「そう言つて怒りにふるえるマミコの胸に、一瞬、男の視線が刺さる。

「男は恥ずかしげに視線をそらしたが、マミコは悪い気はしない。

「十三歳とは思えないくらい発育のいい胸。

「友だちには、牛乳が出そう、と言われながらもマミコにとつては数少ない自慢できる部分なのだ。

「男の顔は赤くなるどころか、さらに青白くなつたように見える。

「わ、わたしは牛乳は飲まない」

「その顔色を見ればわかります」

「いや、日にあたつていないからね」

「ひきこもり？」

「ひきコウモリという感じかな……」

「不健康。でも、だいじょうぶ。うちの牛乳さえ飲んでれば」

「だ、だから牛乳は……」

男は肩にかかる髪を手で払う。

「長くなりそうだな」

「うちの牛乳とつてくれたら短くなるけど」

男は、しょうがないなあ、という感じの笑いをもらす。

マミコは男の顔から目が離せない。

近くで見れば見るほど、若く見える。

たぶん、二十代。

目もと、口もと、鼻すじまで涼しげで、風通しのいい顔立ちだ。

何度も不健康と言いながら、青白さが似合ってるな、とマミコは思う。

「牛……」

「もう聞きました。嫌いなんでしょ。飲まないんでしょ」

そう言って、マミコはおなかにかくしておいたカタログをとり出す。

「山葉牛乳店にはふつうの牛乳だけでなく、からだにいいものならなんでもそろっているのです。

もしかすると甘党のあなたにいかがですか、濃厚フルーツ牛乳。お風呂上りはこれできまりだ、なつ